

隅田川の空に次々と上がるスターマインが、あでやかな絵を描いていた。花火は人の心を華やがせる。隣のお年寄りもは缶ビールをとおおり、しゃべった。

「花火つてのは、気持ちがいいね。仕掛けがあるのが、ホントにいいよ」

ここは東京都台東区の



日雇い労働者の街、東京・山谷。ドヤ（簡易旅館）が並ぶくすんだ街角に小さなホスピスがある。「きぼうのいえ」。流転し続け、行き場を失った人たちがたどり着く「終のすみか」だ。そこには、人生の最終章を迎えた入居者とスタッフが織りなす不思議な安らぎがあった。何度か訪れて、人々の息吹にふれた。

「きぼうのいえ」の屋上。

山谷のドヤ街のど真ん中にある鉄骨4階建てのこのホスピスは、周囲のドヤより頭ひとつ高く、花火を眺めるには絶好の場所だ。この日、2004年7月31日も、入居者やスタッフらが集まって楽しんでいった。

そんなにぎわいをよそに、すぐ下の3階の一室で、ひとりの男性が最期のときを迎えようとしていた。

花火が終わり、そっと部屋のドアを開けると、甘酸っぱいにおいが漂ってきた。照明は薄暗く、適度に空調が利き、CDデッキから心地よいリラクゼーション音楽が流れている。「ごめんね、痛くして」そう語りかけながら、ベ

ッドサイドにいた山本美恵さん(47)が、腰をかかめて男性の鼻に管を入れていく。

美恵さんは、夫の雅基さん(41)らとともに「きぼうのいえ」を運営している。

「土屋さん、痰をとるよ」

美恵さんが声をかけた。何の反応もない。だが、美恵さんはこちらを振り向いて、こう話した。

「私のいうことは全部わかっていきます。ときどき、ウーンとうなるんです。管を入れたときにちようどゴロゴロって鳴ると、たくさんとれるんですが」

土屋照男さんは昭和13年生まれ。「きぼうのいえ」に来て1年近くになる。末期の肝臓がんだ。山形県で生まれ、中学卒業後に上京す

ると大工になった。酒が好きで、カップ酒を何本も一息で飲み干す。結婚して男の子ひとりに恵まれたが、やがて離婚。請負仕事も減り、93年に生活保護を受けはじめた。肝硬変、胆石症、狭心症、不眠症、脳梗塞、胃潰瘍、幻聴など、よく生きてきたと思うほどの病気を抱えている。

美恵さんが土屋さんの左肩の下に手を差し入れてマッサージをはじめた。

「花火、すごかったよ」

「……」

「ここへ来てよかったね。友達たくさんできたしね」

「ウーン」

「来てくれてありがとう。がんばったね。逝きたくなったら逝っていいからね」

荒い息が吐き出され、腹が大きく上下する。手を握ると温かく、わずかな生命力は感じさせるもの握り

# 行き場なき人々の

# 静かで豊かな終章

# 東京 山谷のホスピス 「きぼうのいえ」



返す力はない。

翌朝、土屋さんは静かに息を引き取った。

私は12年前から、新宿西口で段ボールハウスに住む人々の話を聞いてきた。個性豊かな彼らに共通するのは、経済的困窮だけではなく、人間関係の絆が切れて路上に至ったことであった。そして皮肉なことに、路上の仲間で、人とのつながりを築いていた。一方で、生活保護を受けてアパートに入ると、仲間とのつながりが薄れて、ときに独居老人になってしまう。知人の男性は、99年にアパートを借りてからテレビと酒浸りの日々が続き、認知症になって入院している。

屋根のある暮らしと豊潤な人間関係の両立。その答えが「きぼうのいえ」にあるのだろうか。私は、そんなことを考えて訪れていた。「きぼうのいえ」は02年10月に誕生した。路上で生きてきたり、生活保護を受けたがひとり暮らしが難しかったりして行き場のない人

の「終のすみか」である。

入居者は21人だが、ホスピスという性格上、入れ替わりは少なくない。今年6月までで24人を看取っている。「ここでは、やさしい人はやさしく、怒りっぽかった人は怒りっぽくでいい。人生の最後に、その人らしく生き直す場を提供できたらと思っています」

と代表の雅基さんは話す。

## 昭和史を生きた 多彩な入居者達

雅基さんは両国育ち。父は警察官僚だった。89年から、小児がんなど難病の子

どもとその親を支えるNPO(当初は任意団体)で働

いた。だが人間関係がうまくいかず、99年ごろ、鬱状態になった。実家でひとり

「本当は何をやりたいのだろう」と考えた。自分の行く末が、孤独に人生を終えるホームレスの人と重なっ

た。そこで浮かんできたのがホスピスであった。

「路上で生きる人たちをひ

とりで死なせない施設をつくりたいと思ったんです」

父の通帳を担保に借金して賃貸物件を探したが断られ続けた。たまたま、山谷で、不動産屋がもてあます銭湯の跡地があり、土地を担保に借金して買った。約45坪で4500万円だった。土地探しの傍ら、クリスマスでもある雅基さんは、母校上智大学で、「死の哲学」で知られるアルフォン

ス・デーケン教授が社会人向けに開いていた「ホスピスボランティア」の講座に出かけて、ボランティアを求めた。そこで出会ったのが美恵さんである。

現在、専従スタッフが夫妻を含めて5人、非常勤スタッフやボランティアが合わせて20人弱いる。このほか、往診医、訪問看護ステーション、牧師などさまざまな人がかかわる。入居者は生活保護の受給者。家賃6万9千円、食費4万5千円、共益費をもらっている。教会関係などからの寄付も受けているが、開設当初は

旅立ちが近い入居者の清水文子さんの手を握るキャロルさん(左)、柴田正昭さんの部屋(中)、毎週木曜日のお茶会(右)

あった一般の寄付は減り、収支は苦しい。

入居者は多彩である。

シベリア抑留経験者、坑夫、捕鯨船の船員、銀座のキャバレーのパーテン、大工、鳶職、蒸気機関車の運転士、歌舞伎の照明係、営林署員、そば職人……。こうして職種を並べるだけでも、昭和史に刻み込まれた人生が見えてくる。

「男一代御意見無用」

そんな文字を腕に彫っている柴田正昭さんは、昭和9年生まれ。本人の話では、終戦前に東京から母の実家のある山口県岩国市に疎開していたが、8月14日に空襲に遭い、戦後、ひとりで3日間かけて戻った。

上野駅の地下道で暮らして靴磨きをした。そこで知り合った床屋の親方に拾われ理容師の免許も取った。だが、それで安定することはない。映画館の売り子、食堂、居酒屋などで働き、やがて捕鯨船に乗った。

船団を組んで秋に出て翌年の春に戻る。シロナガス

クジラを追って南氷洋へ。網のついた銆を発射する砲手は一人前になるのに10年かかるという。もっとも柴田さんは板前だった。

「調理師は3交代で、酒は樽で積んでいく。いちばん怖いのはシヤチ。海の中に落ちたら一巻の終わりだからね。ジョーズと同じ」

## 花見で響いた 豪快な三本締め

柴田さんはいま、緑内障と白内障で視力をほとんど失っている。それでも、毎週木曜日に「きぼうのいえ」4階の娯楽室で開かれるお茶会には、同じ4階の自分の部屋から廊下を伝い歩きして顔を出す。そこで、他の入居者やスタッフたち相手に持ち前の雑学を披露して場を和ませる。

「目が見えないと勘が鋭くなり、耳がよくなる。エレベーターの音だつて上りと下りで違う」

と柴田さん。だからか、これまでにも隣人が夜中に

倒れたときに宿直スタッフに通報して感謝されている。

また毎晩、廊下の電気を消したりトイレットペーパーを交換したりといった細かい雑務を自主的に行う。

「ずっと自由奔放にやってきて、今は人生のお釣りを生きているだけ。ここは人生の終着駅。スタッフはみんな親切で、かゆいところの手が届く。だから、現状でできる限りのことを奉仕の気持ちでやっています」

今年1月、入居者のひとりがかなくなった。柴田さんは彼の死の少し前、残りの人生をどう生きるか話し合った。たばこを一本あげると、後で柴田さんの部屋まで「わかば」をワンカートン持ってきた。

「みんな、苦勞の苦勞をしようっている人たちばかり。あの『わかば』は、初盆が過ぎるまで吸いません」

2階の角部屋で暮らす佐



「きぼうのいえ」を運営する山本夫妻

藤安正さん(84)は、東京・小石川で育った。父は砲兵工廠で働いていた。佐藤さんは志願して陸軍に入り、各地を転戦した。中国では頭上を銃弾が飛んだ。

「ビューン、ビューンって音の弾は遠いんだよ。近いときは、ブツブツブツと土に突き刺さる。そうすつと狙いが定まってるからな。塹壕の中で、弾が切れるまで、雑糞に隠していた煎餅やラムネを食べていた」

終戦のときは国境で旧ソ連軍の戦車と戦い、敗れて捕虜となり、シベリアに抑留された。丸太小屋で生活しながら、枕木用に木の伐採をしていた。亡命した女優の岡田嘉子が「慰問」に来たこともあったという。帰国したのは昭和30年。

家族とは再会できなかった。新橋で見つけたペンキ塗りの仕事でバラオにしばらく行った後、山谷に入り、鳶職に。昭和33年、東京タワーができるときには、てっぺんで溶接をした。

佐藤さんは独身を貫いた。数年前から視力が悪化し今は失明状態、ラジオを聴いて過ごしている。スタッフの佐藤治子さんと散歩に出るのが楽しみで、思い出話の口をつけて出る。根っからの江戸っ子なのだろう。

今年4月に隅田川べりで開かれた花見では、終わりそうになるのを押しとどめて「みなさんの健康を祝して……」と豪快に三本締め。「これがないと、締まらないよな」

といつてニンマリした。あたりまえの暮らしを送っていたのに家族と離れてしまった人もいる。

芳恵さん(仮名)は中部地方の観光地で和食の店を経営していたが、数年前、住居兼店舗が区画整理の対象となつて立ち退きになった。

隅田川べりで開かれた花見。入院先から参加した人もいた。写真下は、清水文子さんの葬儀



女手一つで育てた息子夫婦と同居したが、どうにも折り合いが悪い。

「休日の夕暮れ、クルマが出る音がする。みんな夕飯食べに行っちゃうの。私を無視でしょ。無視されるほど悔しいことないよね」そんなことが重なり、雷が鳴ると打たれたいとさえ思うようになった。

「でも、稲光だけが胸を刺して雷は来なかったわ」

3年前の夏、ひとりで東京し、その日から上野公園



で野宿生活をはじめた。最初から決意しての家出で、過去は捨てるつもりだった。

上野公園では若くして他界した妹の名前を名乗った。年金が出るため、4千円でテントを買い、西郷隆盛の銅像のそばに張った。朝はテントの中でトランプ占いを

をして運勢を見て、昼は路上で小説を読んだりクロスワードパズルを解いたり。周囲の仲間に食料などを援助することもあった。

「寝袋もホカロンもあるから寒くなかった。上野の暮らしは楽しかったよ。姉さん姉さんって呼ばれて怖い思いはしたことない。星がきれいで、うれしかった」

だが、昨年6月に体調を崩して入院し、退院後に「きぼうのいえ」と同じ敷地にある、自立して生活できる

人向けの「なかよしハウス」(全部で11室)に来た。芳恵さんは、今後も家族と会うつもりは一切ない。

俳句を学んだ人らしく、昨年暮れ、何句か詠んだ。

行く秋や一つの笑顔に生かされて

木の葉髪老人館のうれいかな

## 最期の旅立ちを ハープが見送る

「きぼうのいえ」では、毎週火曜日に、ハープを弾きに来る米国人女性がいる。キャロル・サックさん。

4月半ば、キャロルさんは、がんでほぼ昏睡状態になっていた清水文子さんのベッドサイドにすわった。

清水さんの様子を見ながら、ハープを奏ではじめる。最初はアドリブで高音低音

交えながら「ドファドファドファ……」と。音楽に合わせて清水さんの手がときどきに激しく動く。やがて動きが、呼吸が静かになる。すると、曲がグレゴリオ聖歌に変わり、アイルランドの子守歌も歌う。およそ45分。最後は表情が安らいだ。

「ミュージック・サナトロジ」というアメリカで発祥した看取りのケアです。死にゆく人の魂が、次の世に安らかに移行するように、旅立ちの力を与えるための音楽。祈りと考えています」

清水さんは翌朝、90歳で亡くなった。数日後に葬儀があり、屋上の小さなキリスト教の礼拝室で、僧侶でもある非常勤スタッフの山田義浩さん(29)がお経を読んだ。横浜から来た清水さんの姪のひとり、

「接してくれたみなさんがやさしかったから安心感につながったのでしよう、棺の中の顔は、本当に穏やかで肌もきれいで……」

と訥々と語った。山田さんがいう。

「今の時代、いろんなことに満たされているのに命が躍動している感覚を失ってしまっている。ここで活動していると、命が燃え上がる瞬間を感じることがある。自分も救われたという気持ちがあります」

そこには、ケアをする人とされる人という関係を超えた交流が芽生えているのかもしれない。当初は頑なだったのに、スタッフと打ち解けるうちに顔付きまで柔らかくなる人もいる。一方で、入居者同士は、柴田さんが「しゃべりたい気持ちはあるけど、過去は捨てた人が多い」と語るように、心の開き方が難しいようだ。人生の最終章。「きぼうのいえ」で、彼らはどんな思いを醸成して旅立っていくのだろうか。

6月29日、山谷に生きて50年の入居者が亡くなり、玄関前に祭壇が設けられた。彼と親しかった佐藤さんは、見えない目をつむり、遺影をずっと拝んでいた。

本誌・中村智志